主のわざに励む　　コリント第一 15:58

今年最後の主日礼拝の時を持っております。この一年間の主の守りを感謝したいと思います。今日のみことばからパウロはいつも主のわざに励むようにとコリント教会の人々に勧めています。改めて「主のわざ」とは何でしょうか？私たちが神様のためになす働き、例えば礼拝、伝道、交わり、奉仕と言ったことがそれにあたると思います。この一年、それぞれに励むことができました。しかし、時として、「こんなことをしても無駄ではないか。」「私ひとりが頑張っても役に立たないのではないか。」と考えたり、そういうふうに他の人から言われて、がっかりしてしまったことがあったかもしれません。私たちは、意味のあること、意義を感じられることのためなら、苦労があっても励むことができますが、それが役に立たないとか、無駄であると言われると、努力する気持を無くしてしまいます。しかし、聖書は「いつも主のわざに励みなさい。」と言ったあとで、「あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」と結んでいます。私たちが神のために励んだことは、人の目には無駄に見えても、神の前では決して無駄にはならないと教えているのです。聖書は何を根拠にそう言っているのでしょうか。「あなたがは…知っている」と書かれていますが、私たちはどのようにして、そのことを知り、確信することができるのでしょうか。今朝は、そのことを学んでみたいと思います。

１．キリストの復活のゆえに

私たちが神のために励んだことが無駄にならないとの確信は、第一に、キリストの復活から来ます。コリント第一 15:58 は「ですから」という言葉で始まっています。聖書には「ですから」とか「そういうわけですから」という言葉で始まる文章が多く出てきます。それまでの流れがあり、それに基づいて「ですから」とあるわけです。最後の 58 節までコリント第一 15 章は、キリストの復活について議論されています。キリストの復活が事実であること、やがてキリストが再びこの世に来られる時、私たちもキリストが復活されたように復活して神の国をうけつぐようになるということが書かれています。もし、キリストの復活がなければ、私たちの救いもなく、将来の復活もありません。私たちの人生は、この地上にいる時だけのもので、死ねばすべてが終ってしまうのです。もしそうであったら、私たちにとって最善な生き方は、生きている間に楽しめるだけ楽しむことになってしまいます。32 節にあるように「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか。」ということになるのです。

しかし、キリストは、その復活によって私たちを救ってくださったばかりでなく、私たちに「永遠」というものを教えてくださいました。つまり私たちの命はこの地上だけで終るのではなく、地上の生活を終えた後に、永遠の御国が待っていることを、キリストはその復活によって、示し、保証してくださったのです。そして私たちがこの地上で励んだことを、神は覚えていてくださって、永遠の御国で報いてくださいます。天国のことを最も多く書いているヨハネの黙示録には、「書きしるせ。『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。』御霊も言われる。『しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。』」黙示録 14:13 という言葉があります。「彼らの行ないは彼らについて行く」と言われているのは、私たちが行うどんなことも、無駄にはならず、天国での宝になるという意味です。つまり私たちが、今、ここで、していることはすべて永遠の世界とつながっているのです。天国で報いを受けることができるのは、死んでからもその功績を讃えられる人々や、歴史に残るような人々だけではありません。社会的に名前が知られていなくても、家族や友人から愛され、慕われてきた人々や人の目に触れずとも、真実に、誠実に生きた人々も神からの報いを受けるのです。イエス様が話されたタラントのたとえなどを見ると、多くのタラントを預っていた人も、少ないタラントの人も

同じようにその主人から喜ばれています。そのように、私たちが神のために励んだことは、たとえ小さなものであっても神を喜ばせ、それが人の目に触れようが、触れまいが、私たちが精一杯したことに神は報いてくださるのです。

中には小さなことさえ出来ない人はどうしたら良いのかと思う人がおられるかもしれません。「主のわざに励む」と言う場合、確かに神様のために私たちがいろいろと行動、実践することですが「主のわざ」を主がなしてくださる働きとも訳すことが出来ます。つまり、私たちが何も出来なくとも、神様が働きかけてくださって、主の栄光が顕されることがあります。私は人が召された時によくそのようなことを思いますし、それが素晴らしい最後の奉仕であるようにも思えるのです。大切なのは主に用いていただこうと自分から主の前に出て行こうとすることです。この地上のことしか知らない生き方は「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか。」という刹那的なものになるでしょうし、「生きている間に出来る限りしたいことしなければ」という焦った生き方になると思います。しかし、キリストの復活によって、罪と死に勝利しているばかりか、永遠の世界が約束されていることを知っているなら、それは、「いつも主のわざに励む」人生、永遠につながる人生へと、私たちを導いてくれるのです。

イエス・キリストを信じる信仰には、神が創造者であること、聖書が神のことばであること、キリストが処女マリヤから生まれてこの世に来てくださったこと、私たちの罪のため十字架で死なれ、私たちの救いのために死人の中から復活されたこと、やがて、私たちの世界に再び来てくださること等、いくつかの大切な信仰箇条があります。使徒信条などにそれは言い表されていますが、それは、ただ口で唱えて繰りかえせば良いというものではありません。そのひとつひとつは、単なる教えではなく、私たちの生活に直結したもの、私たちの人生を生かす真理です。キリストの復活を信じてそれに生きる時、私たちは「自分たちの労苦が、主にあってむだでないこと」を知り、確信することができるのです。

２．神の愛のゆえに

私たちの労苦が無駄にならないことは、第二に、神の愛のゆえに確信することができます。コリント第一 15:58 は「ですから」で始まっていますが、つぎに「私の愛する兄弟たちよ」という呼びかけがあります。ここでいう「兄弟たち」というのは、肉親の兄弟たちという意味ではなく、神の家族の兄弟たちという意味です。「兄弟たち」という言葉は、クリスチャンを表わす言葉です。しかも「愛する」という形容詞がついています。「愛する」という言葉には、コリント人への手紙を書いたパウロが、コリントのクリスチャンを愛しているという意味があるでしょうが、それよりも、コリントのクリスチャンたちが神に愛され、また神を愛する人々であるという意味が強く込められているように思います。したがって「愛する兄弟たち」というのは、「キリストにあって神に愛され、神を愛する人々」という意味になります。

そして、神を愛している人たちは、神に愛されていることによって、「自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知る」ことができるのです。ローマ人への手紙 8:28 に「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」とあります。この聖句は、神が、私たちを愛してくださっているゆえに、私たちを特別待遇してくださる、私たちのために特別なとりはからいをしてくださるということを言っています。神はすべてのものを造り、それを治めていてくださるお方です。神は、公平に世界を治めておられますが、神は、ご自分の愛する者たちのためには、特別なはからいをしてくださるのです。それが神の恵みです。もちろん、私たちは利己的な目的のために神の特別なとりはからいを願うべきではありませんが、あわれみ深い神は、私たちの益になるようにと、私たちの身の回りのものを整えてくださるのです。

一年を振りかえると、感謝だったことと共に、あの時、こうしておけば良かった、この時、あんなことをしなければ良かったと悔やむこともあるでしょう。しかし、神はそうしたことも含めて「すべてを益にしてくださる」のです。私たちにとってマイナスに見えるものも含めて、神はそれらを「益に」「プラスに」変えてくださるのです。キリストを信じる者は、なによりもまず、自分が神に愛されていることを信じ、そのことを確信しましょう。神を愛せるようにしてくれたら、私も神を愛せるようになるのにといった段階で立ち止まるのではなく、まずどれほど自分が神に愛されているのかに思いを馳せたいと思います。そして、神の愛を確信することができたなら、神が、その愛のゆえに、いつどんな時でも、私たちのために最善をしてくださることを、堅く信じていきましょう。神の愛を心に留めている人は、決して失望、落胆することはありません。神に愛されているがゆえに主のわざに励むことが出来るのです。

３．神の計画のゆえに

私たちの労苦が無駄に終らないことは、第三に、神のご計画のゆえに確信することができます。神は「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のために…すべてのことを働かせて益としてくださる」方です。神は、私たちに計画を持っておられます。神は、その計画の一部を私たちに示してくださっていますが、神の計画の全体は、私たちの思いを超えた大きなもので、私たちは、そのすべてを知っているわけではありません。ですから、私たちは神によって与えられた役割を最善のものと信じて、それに励むのが良いのです。神は、私たちに無駄な役割や無意味な仕事をお与えになりません。人の目には無駄に見えても、時には自分にとってもあまり意味がないように思えても神は無くてならないものとして用いてくださることが多いのです。

クリスチャンの歩みは世の中の価値観からすると非効率的に見えたり、非合理的に見えたりすることがあります。特に伝道という「主のわざ」を考える時、私たちは、時として「こんなことは無駄ではないか。」と思えることがあります。しかし、それでも、神はすべての人に伝道するように命じておられます。私たちは、あきらめずに、いままで伝道を続けてきましたし、これからも続けていかなくてはなりません。それは、主の命令であり、教会の使命、「主のわざ」だからです。効率的な伝道のしかたを考えることも大切ですが、伝道では「無駄」をすることを恐れてはならないと思います。伝道では、人の目に無駄と思えるようなことが用いられることが多く、何が効果があって、何が無駄かを区別できないこともあります。私たちも、その時、その時の目に見える結果だけで一喜一憂するのではなく、いつ、どんな場合でも、私たちの最善をつくして励みましょう。神はそれを用いてくださるのです。「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」

この一年のすべての歩みが主にあって無駄なものは何一つ無いという確信に立ち、新しい年も、着実に「主のわざ」に励んでゆきたいと思います。